



『幼児の教育』とわたし

— 子どもの絵について —

林 健造

『幼児の教育』ときくと、なぜか昭和三十年頃のお茶の水女子大学の旧附属小学校の工作室の窓から、正門通りの美しい銀杏並木を眺めている自分と、附属幼稚園の方から、『幼児の教育』の編集の帰りらしい学生上りの赤池さん（現在洗足学園教授木原さん）とフレール館の編集部におられた笹田信三さんの歩いている姿が浮かんでくる。

私は昭和二十八年、金沢大学からお茶の水女子大学に移り、主に附属小学校の図工科と幼稚園教員養成科と児童学科との美術教育を担当していた。その時の幼稚園長は、既に倉橋惣三先生は三年前に退任され、及川ふみ先生で、主任は私と同郷の菊地ふじの先生で

あつたが、倉橋先生の残香は隔々に色濃く生きていた。

また、平成二年の正月からは、本誌の表紙の絵を依頼され、幼児教育にふさわしいものというので、木の葉の帽子をかぶった少女像を描き、月毎に色だけをかえて一年程続いたことがあつた。多少、評判がよかつたのかもしれない。

『幼児の教育』は、薄い小冊子ながら、執筆者である学者も保育実践家もすばらしく、読みおとせない実に密度の高い内容の本であつた。

私自身も、大変学ばせられることが多く、特に昭和五十八年から四年間にわたり、日本保育学会で発表した「倉橋惣三と造形活動」や六十二年に建帛社より出版した『幼児造形教育論』中の「倉橋惣三の造形教育観」の章は、特に津守真先生にすすめられた『幼児の教育』の古いものの中から発見した資料のおかげであつた。

倉橋先生は、大正時代の『白樺』・『赤い鳥』、『自由画教育運動』とも深いかわりをもつた方なので、当然子どもの絵や工作の教育についても一家言をおもちの筈であると思つたことが私の研究の出発であつた。

当時の、子どもの絵は大人のお手本を与えることで学ぶ、と思つていた時代のエピソードがある。

『幼児の教育』第二十三巻第七号（大正十二年関東大震災の年）の中の「教育問答（一）幼稚園の必要」の中から。

(前略)

主 どんな、お手本をお上げなんです。

客 私は、よく知りませんがね。なんでも、いつか、出入りの経師屋が、坊ちゃんにといつて、五六枚描いて呉れたとか言つてました。

主 松の日の出に鶴ですか。

客 そうじゃありませんまい。父の時から出入の、一寸、きょうな老人なんですけどね。一枚はたしか、略描きの七福神でした。

主 これは驚きましたね。

客 え。

主 それは、あんまり、おかわいそうですよ。

客 だれが。

主 お子さんがです。

客 なに、家内だつて、そればつかし描かせるんではありますまいがね。しかし、何か手本がなくちやあいけないでせう。

主 手本なんか、いりませんよ。





客 画に。

(中略)

客 手本は。

主 与へません。

客 何を描きます。

主 いろ／＼のものを描きますよ。一枚々々自分の画を描きますよ。

客 それでいゝのですか。

主 幼稚園の子どもに画を描かせるのは、絵の稽古をさせるのではなく、心にあるものを、存分に表はさせるのですから。(傍点筆者)

(後略)

右の主とは倉橋先生です。臨本を廃し、心の表現を大事にしていることは、今日の表現のねらいと百年たっても同じでけだし名言である。

その他、幼児の絵は、絵画というよりは「記語」であると喝破されたのも倉橋先生であった。

(十文字学園女子短期大学名誉教授)